

2015. 1. 8 (木)

孤独から希望そして自由へ

荻野昌弘

元旦の「ショーシャンクの空に」

皆さん、あけましておめでとうございます。私は元旦に、90近い両親が住む実家で正月を過ごしました。朝から酒を飲む正月です。これはわが家の恒例行事で、数えて90歳の父も朝から酒を飲みます。私の父は毎日飲んでいるので、あまり関係ないんですけども。

それでたまたま朝、テレビを付けたんです。地上波の放送では面白い番組をやっていないのでBSの方にしたら、映画が始まったんです。その映画、アメリカ映画なんですが、見ているとこれはどこかで話を聞いたことがあるんじゃないかと思ひ始めたんです。その映画はすごく面白くて、年老いた両親と3人で最後までずっと見ていました。

その映画は何だったかと言いますと、12月に岡田先生がこのチャペルの時間で紹介をされた「ショーシャンクの空に」という映画だったのです。皆さんのなかにはすでに見たことがある人もいれば、まだ見たことがない人もいるかもしれませんが、岡田先生がお話されたときも面白い映画じゃないかなと思っていたのですが、偶然、元旦お酒を飲んだ状態で「ショーシャンクの空に」を見るという非常に幸せなひとときから新年は始まったんで

す。

映画を見ていると、あまり細かい話はしませんけれども、いくつか本当に興味深い事がわかりました。一つは「ショーシャンクの空に」は、刑務所の中での話ですが、聖書というのがすごく重要な意味を持っているんです。いわゆる聖書その中身だけではなくて、(聖書を持ちながら)聖書ってというのはこういう書物ですが、このモノとしての聖書が非常に意味を持っているのです。見たことがない人はぜひどういうところで意味があるのかを、映画で発見していただきたいと思ひます。それ以外に時々聖書の言葉が出てきて、実は映画のストーリーの背景として聖書が非常に大きな意味を持っているということがよくわかります。

この映画の最大テーマは、秋学期のチャペルの最後のテーマである希望、hopeです。この意味で、先ほど打樋先生に読んでいただいた聖書の一句(ローマの信徒への手紙5:1-5)は、映画には直接出てこないのですが、非常にこの映画と深く関わっている箇所ではないかと思ひます。つまり「希望は私たちを欺くことはない」というのが、一貫した映画のメッセージとしてあるのです。映画が描いているのは、希望を追いかけていく、あるいは常に希望を持っている、そういう主

人公の話です。

孤独、ともだち、希望そして自由

皆さんはずっとこのチャペルに出ておられると思うので、孤独、ともだち、そして希望の3つのテーマで秋学期のチャペルが守られてきたということはお分かりだと思うんですが、この3つのテーマが深く関わっているということが、映画を見るとよく分かります。

主人公は、刑務所に入ってきた当初は孤独なのですが、その中で友だちを探さんです。そしてしだいに友だちができていきます。終身刑になっているので、いつ刑務所から出られるかわからないのですが、自分はいずれ外に出たいという希望は常に持っています。何故なら彼は無実の罪で刑務所に入れられたからです。刑務所生活がもう何十年も続く中で、真の友だちができます。そして、最後に、刑務所から出るという希望がかうんです。主人公は、刑務所から出て、自由になるわけです。だから、孤独、友だち、それから希望という3つのテーマに、私は、自由ということばを加えたいと思います。

つまりこの映画は、「真理があなた方を自由にする」という社会学部の聖句とも非常に深く結び付いていて、実際、真理はどこにあるかということが、ある意味常に映画の中で問われています。本当の意味での真理がどこにあるか、真の友情は何か、それから、実は罪を犯していないのに、刑務所に入れられているという事実、つまり自分が本当は無実であるという真実をいかに明らかにするかという問題です。そういう意味で、主人公は、常に真理を追及しています。この姿勢が、最後

には、主人公に自由を獲得させることにつながるのです。

「ショーシャンクの空に」は、いろいろな点で非常に興味深い映画なので、ぜひ見ていない人は見ていただきたいし、原作もありますので、それを読むのもいいのではないかと思います。それで振り返って、改めて孤独、友だち、そして希望という3つの言葉を考えてみると、私は今回の3つのキーワードというのはすごく重要であるし、普段はあまり語り合うことはないけれども、何となく漠然と感じたり、考えたりしている、そういうテーマをこういう場所であらためて考えてみるということには、たいへん意味があったのではないかと思います。

震災後の孤独

秋学期のチャペルのテーマは、最後に希望にいたるのですが、孤独から始まっています。ここが私は非常に重要なところだと思います。孤独がないと、おそらく希望も持てないんじゃないかなというふうに、あるいは友だちも持てないのではないかと、そういうふうに私はこの秋学期のチャペルを理解しました。先ほどの「ローマの信徒への手紙」の中では、苦難となっていますけれども、これを孤独というふうに考えてもいいのではないかと思います。ですから孤独が希望につながるというふうに考えられると思います。

それで私もあらためて、孤独というのはどういうものなのかということについて考えてみました。孤独というのは、寂しい状態なのですが、特にその孤独感を強く感じるのは自分が何かを失った時、あるいは誰か人と別れた時、そういう時に強く孤独を感じるんで

はないかというふうに思います。

それで20年前に阪神淡路大震災が起こったわけですけれども、おそらく皆さんのほとんどは、その時の記憶は被災地に住んでいたとしてもないのではないかと思います。だから、お父さんやお母さんに話を聞いたりした人もいられるかもしれませんが、実感はあまりないだろうと思います。

しかし、私はその当時すでに社会学部で教えていたのですが、そしてまだその当時は助教授でしたけれども、地震で関学の学生が16名亡くなっています。これは考えてみますと、何とも言えないことなのです。想像してみてください。同窓の学生が、16名、もしかしたらその中に友だちもいるかもしれない。その16名が一瞬のうちに亡くなってしまおうとは、これは本当に重いというか、何とも言えない事実であると思います。

実際に私のゼミ生の中でも、前日まで会って、一緒にいたのに、その翌日になったらもう亡くなっていた。そのことをとても自分で受け入れることができない。そのようなことを言っているような学生がいました。

私自身は個人的には学生だけじゃなくて、文学部の中川教授というのが亡くなったのですが、その中川先生と私は震災が来る1年前までは同じマンションに住んでいて、引越した先で、中川先生は亡くなりました。もし同じマンションにずっと住んでいたら、別に死ぬことはなかったのです。また、誰かが亡くなるというんなことがわかる、たとえば隠れていた姻戚関係がわかってくるのですが、後から、私は中川先生とは親戚だったということがわかって、なおさら悲しみは深くなりました。

孤独からの希望

いろいろなものを失ったり、人と別れたりするということは、人生の中で常に付きまといます。その時に孤独感を感じます。それは非常に悲しい事ですが、常に起こることです。例えば恋人と別れる時にも本当に孤独感を感じます。しかし、なんとかその孤独から逃れようとしています。そういう意味で、孤独というのはその次のステップに行く出発点でもあります。別れるのは悲しい、しかしその場面とどまっていたはやはりだめなんです。いろいろな別れを経験するのですが、その後、個人としても社会としても、次の段階に向かって、未来に向かっていかなければならないのです。

ですからある意味で、希望と孤独は対になっているというふうに考えられるのではないかなと思います。孤独というのは単に否定的な意味を持つだけではなくて、希望を持つための前段階として、われわれの中になくならないものではないかというふうに考えられると思います。

以上のことから、「苦難が忍耐を、忍耐は練達を練達は希望を生む。希望が私たちに欺くことはない」というこの聖書の一句は、この秋学期のテーマとすごく結び付くような一節であって、いつもいつも孤独とは何か、希望とは何かと、そんなことを考えて過ごしているわけにもいきませんが、何かふと立ち止まって自分で考える時に、秋学期のチャペルで聞いたことを思い出して、次どうしようかと考えるのは非常にいいことではないかと思えます。

私は学部長として3年間このチャペルに出ているのですが、あらためてチャペルは非

常に意義のある場所であり時間であるなと思います。ぜひ皆さんは、また来年も出席していただきたいと思います。

(社会学部長・教授)